

「観光」を勘考する

写真は 2013 年 9 月、名古屋市立大人間文化研究科の同僚や院生らと共同で出版した『名古屋の観光力』。出版から 10 年近く経つが、退職半年前で、忘れられない編集と出版である。「はじめに」から。

社会学者のジョン・アーリ『観光のまなざし』(1995 年)は、ミシェル・フーコーの〈まなざし〉の概念を手がかりに、ツーリストの視線とその対象を歴史的・経済的・文化的・視覚的なさまざまなレベルにおいて分析した画期的な〈観光論〉として名高い。本書は「観光のまなざし」を名古屋にあてる。まなざしの焦点は、名古屋の観光力である。名古屋の観光力の現実をシビアに見つめ、名古屋ならではの観光戦略をさぐる。ここ 7 年余り続けてきた「名古屋の歴史・文化・まちづくり」の共同研究と講義をもとに、名古屋の観光を勘考していきたい。まずは名古屋の歴史から、観光の旅をはじめよう。

本書の成り立ちは、名古屋市市民経済局からの依頼を受け、大学の地域連携の一環として 2006 年 4 月に立ちあげた「観光研究プロジェクト」にさかのぼる。この研究プロジェクトは、人文社会科学の諸分野から名古屋の観光を学際的に調査研究することを目的とした。この共同研究の成果は人文社会学部の総合科目「名古屋の観光」に反映され、観光まちづくりのシンポジウムなども開催した。

本書を久しぶりに手にしたのは、すこし「わけ」がある。レポートで紹介したように、2 月 23 日に立命館大で開催された国際シンポジウムに参加した。龍谷大の阿部大輔氏の「観光政策再考:ポスト・オーバーツーリズムにおけるいくつかの論点」という報告を聴いて、すこし質問とコメントしたからである。国内外のオーバーツーリズム、とりわけ京都の実態を改めて確認できて、10 数年前に考えていた「観光まちづくり」との落差を痛感した。いまから考えると、「観光まちづくり」を安易に考えていたと思う。とりわけグローバル時代の都市観光、過度な観光客流入による地元住民の日常生活への影響など、観光の負の側面への視点と分析が弱かった。名古屋市観光戦略研究会座長をつとめ、観光戦略ビジョンをまとめたこともあり、不十分な提言など反省しなくてはならないことも多い。名古屋から大阪に転居して驚いたのは、急増する外国人観光客だった。それと観光に依存するような都市・経済政策に疑問を感じた。大阪府と大阪市が、IR という名のカジノ誘致に狂奔することに違和感を覚えた。とりわけ大阪市がカジノ誘致のために、夢洲という軟弱地盤の人工島の土地対策に底なしの公金を投入することは、大阪市民として許せなかった。思い切って、住民訴訟の原告にもなった。



(2023 年 3 月 3 日)